

Title	ポール・ボンヌタン他「五人宣言」(1887) 解説・抄訳
Author(s)	菊池, あずさ
Citation	演劇学論叢. 2008, 9, p. 182-189
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/97492">https://doi.org/10.18910/97492</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# ポール・ボンヌタン他「五人宣言」(一八八七) 解説・抄訳

——ゾラに対する若き自然主義者たちの絶縁宣言——

菊池 あずさ

一九世紀における自然科学の驚異的な進歩や実証主義の精神の進展は、文学や芸術の世界へも深く影響を与えた。進化論を確立したダーウィン(Charles Darwin, 1809-83)や『実験医学序説』を著わした生理学者クロード・ベルナール(Claude Bernard, 1813-78)、実証主義の哲学者イッポリト・テーヌ(Hippolyte Taine, 1828-93)らの理論にふれたエミール・ゾラ(Emile Zola, 1840-1902)は、すでにロマン主義への反動として現れていた写実主義(réalisme)の傾向をより生物学的、実証主義的に徹底させる自然主義(naturalisme)を提唱した。一八七七年に彼が発表した『居酒屋』の成功で自然主義文学は隆盛を極め、この文芸思潮は自国フランスのみならず、イギリス、ドイツ、アメリカへと拡大、明治後期の日本の文壇にも強い刺激を与えることとなった。

自然主義文学は、人間は遺伝や環境などに支配されているとする決定論の立場から、作家の主観を排して現実世界の克明な観察をもとに、近代社会に生きる人間の姿を見つ

めようとした。ゾラは「実験小説論」(一八八〇年)の中で「科学者が実験室で観察するように冷静に人間及び社会を観察し、遺伝と環境によって形成される人間を描く」と述べている。

このような考え方は演劇にももたらされた。「実験小説論」の翌年に発表された「演劇における自然主義」の中で彼は、人間を決定する要因としての環境を正確に伝えるべき舞台装置の役割について、次のように論じている。「幕があくと同時に、登場人物が動きまわっている場所を目にしただけで、その性格や習慣の基本的な条件が得られれば、正確な装置というものがどれほど重要か理解されるだろう」<sup>(2)</sup>。こういったゾラの演劇理念が、アンドレ・アントワーヌ(Audre Antoine, 1858-1943)に影響を与えたことは疑いの余地がない。彼は一八八七年三月「自由劇場」を旗揚げし、従来の上演方法を刷新する自然主義的演出で演劇史にその名を刻んでいる。

ゾラをはじめとする自然主義の作家は、このような理論に基づいて、卑近な俗世間に題材を多く求め、とりわけ社会の底辺層にいる労働者や農民の生活を描くことを好んだ。このような傾向はときに、生来の獸性や性的衝動に突き動かされる人間を細部にわたってとらえ、その醜悪な姿や残酷な行爲を克明に描き出した。そのため、自然主義を標榜するゾラに対して非難の声も絶えなかつた。

もっとも批判されたのが、一八八七年五月二八日に『ジル・ブラス』紙上で連載が開始された小説『大地』(La Terre)であった。この作品の完成は九月一五日付の同紙上だったが、連載の完了を待たずして次々と攻撃者が現れた。アナトール・フランクス(Anatole France, 1844, 1924)やフェルディナール・ブリュンティエール(Ferdinand Brunetière, 1849, 1906)もその一人であった。また、自然主義陣営からもゾラに対する大きな不信感が噴出した。それがこの「五人宣言」(Manifeste des Cinq)である。演劇の上演史に革新をもたらした自由劇場の旗揚げから半年もたたないうちの出来事であった。連載中の八月一八日付『フィガロ』紙の第一面を飾ったこの宣言文は、自然主義に傾倒し、かつてゾラを師と仰いだ五人の青年作家によって発表された。その五人とはすなわち、ボンヌスタン(Paul Bonnetain, 1858-99)、ロニー兄(J.H. Rosny, 1856-1940)、テカーヴ(Lucien Descaves,

1861-1949)、P・マルグリット(Paul Marguerite, 1860-1918)、ギッシュュ(Paul-Gustave Guiches, 1860-1935)である。<sup>(1)</sup>

連載中であるため、作品の全体性を度外視した幾分不公平な批判ではあつたが、完成を待たずして発表されたところに、かえって自然主義陣営の苛立ちがよく表れているといえるだろう。ゾラの『大地』は、現代においてはバルザック(Honoré de Balzac, 1799-1880)の『農民』(二八四四年)とならぶ農民小説の傑作として評価される面もあるが、当時は、その性欲の露骨な描写や土地をめぐる骨肉相食む暴力性が問題視された。「五人宣言」もやはりこれらの問題点をとりあげ、最終的に『大地』を「スカトロジー」「猥雑文学」と断じ、ゾラが「汚物の底まで身を落とした」ことを嘆いている。そしてゾラとの決別と同時に、彼が自然主義者ではないこと、さらに彼ら五人が自然主義を放棄することを宣言している。カールソンによるとこの絶縁状が今日悪評しかなされない理由として、「彼(ゾラ)が、人里離れたところで楽しく過ごし、初めは必要性から、次に信条から、禁欲を誇張したこともまた明らかである。若かりし彼はとても貧しく、臆病だったで、我々が女を知るだろうという年頃には彼は少しも知ることもなかつた。そして、明らかに誤ったイメージが彼につきまとつたのだ。また、腎臓の病気から生じる精神不安によって、おそらく彼は過

度にある機能について心配するようになり、彼にとつてその重要性を増大させることとなつた」と述べられているように、五人がゾラ個人の精神的及び身体的欠陥にまで攻撃の矛先をむけたことが挙げられる。<sup>5)</sup>

「ゾラが実際には自然主義者ではない」という説こそ、本来ならばより重要な論点であつたはずである。なぜならゾラの自然主義理論は、作者の主観を排することを求めるものだつた。それに対し、「五人宣言」において彼らは「ゾラ個人の確かな精神的あるいは身体的欠陥がゾラを卑俗で卑猥なものへの興味へと駆り立て」、「大衆に性的な快感を与へることによつて得られる俗的利益にゾラが惹かれていた」<sup>6)</sup>との批判をしている。作者の精神的、身体的欠陥とは、すなわち作者個人の偏向であり、その意味では、たとえ無意識的であつたとしても、現実に対する客観的な観察が疑わしいものとなる。その欠陥をより強く論破することによつて彼ら五人の宣言は文学史上意義深いものとして評価されたかもしれない。しかし結局「五人宣言」は、この反自然主義的態度を批判したというよりも、ゾラ文学の猥褻性に対する単なる怒りに終始していると言えよう。実際五人は皆、早急な議論を浴びせたことを後になつてから悔いており、現在ではこの「五人宣言」は小説全体の意義を解すことなく、一方的な絶縁状を叩きつけた悪名高き事件

として理解されている。またカールソンも、デユマ・フィスが『異邦人』の序文で展開した理論の方が、より影響力をもっていたと指摘している。<sup>7)</sup>だがブリュンティエールの『自然主義小説』（一八八二年）を契機に、ゾラと自然主義文学への反動が強まりつつあつたこの時期、こうした形で発表された「五人宣言」は、来る新しい思潮の一つの急先鋒となつたことは間違いないであろう。

ポール・ボンヌタン他「五人宣言」抄訳<sup>8)</sup>

『大地』

エミール・ゾラへ

少し前までエミール・ゾラは、文学の若芽をつけながらも厳しい非難を引き起こすことなく作品を書くことができた。あの『居酒屋』を発表して以来、つまり次世代が反逆を企てようと自然主義の基盤を固めたあの激しい論争以来、ほんの数年しかたつていない。腹立たしいほど繰り返される常套句にうんざりした若者達は、この偉大な作家によつて穿たれた血気盛んな突破口と、ロマン主義者の展開を心に留めたのである。

彼が非常に強靱で、素晴らしいほど頑強で、あまりに威勢がよかつたので、意志力という病に丸々毒された我々世代は、他でもないその強靱とその頑強さ、そしてその威勢の良さのために彼を愛したのだつた。長い時間をかけて戦いの準備をしてきたパリの仲間、先駆者、斬新な巨匠たちでさえも、過去にゾラがなした貢献に感謝の気持ちをもちながら耐えていたのである。

だが、『居酒屋』の次の日から重大な過ちが犯されてしまったのだ。激震を与えた後のゾラ氏は、指導者が煽るだけ煽つて要求で膨らんだ革命によくありがちな類の、そういった事態から逃れているように、若者には思えたのだ。戦場で仰向けになる以上のことを望まれていた、跳躍の続きを待たれていた、芸術の失効を覆しながら、文学に、演劇に与えられる美しい命が求められていたのだつた。

しかし、彼は辛抱強く自らの仕事を続けて行つた。彼は倦むことなく進んで行き、若者は禁欲的な氏に対し、優しい共感と賞賛とともに彼に付き従つた。老人たちや知識人はそれ以来、目をつむり幻想を抱こうと、秩序の中に引きずり込まれた氏の車輪を見ないようにした。

確かに、逃げ出し、メダンへ移つたゾラ氏を見るのは驚きで、辛いものであつた。当時にしては軽度ではあつたが、努力が必要だつた。その努力は、戦いと確立の手段に、

そして限りなく美的ではない秩序の充足に必要なつた。それより、若者は彼の身体的離脱を許してあげようとしていた！だが、より悲惨な離脱がすでに現れていた。それは、この作家の作品に対する裏切りである。

本当のところ、ゾラは日々彼の執筆作業に裏切りを重ねていった。信じられないほど「個人的実験」に怠惰で、他所でかき集めた粗悪な書類で武装し、ユゴーの誇張にあふれ、くだい話と永遠に続く常套句の中で崩壊しながらも、厳しく簡潔さを説いていただけに腹立たしい。彼は、自分の信奉者たちの中で最も熱狂的な者でさえも、狼狽させていた。

また、観察力の鋭くない者でも、このいわゆる第二帝政期のある一家の「自然的」「社会的」物語の滑稽さに、血縁の繋がりの脆弱性に、例の系統樹の子どもつぽさに、氏の医療や科学的知識の深い欠如に、気づくはめになる。しかし、たとえ親密な仲間内であつても、失望をはつきり示すのはいやだつた。次のように言つたものだ、「彼はおそらくこうしたかつたのだ」、「少しあれが足りないだけだと思わないか」。失望したレビ人たちはあらゆる臆病な観察によつて、自らを絶望に追いやりたくなかつた。旗を下ろすことは辛い。そして、最も大胆な者すら、結局ゾラは自然主義ではない、バルザック、スタンダール、ゴンクー

ル以後、現実の生活についての研究は生み出されていない、とささやくだけだった。だが、誰も書こうとはしなかった。この異説について。

しかしながら、『ルーゴン・マッカール叢書』における、下品さや卑猥な用語の過度な表現を前にして、こらえがたい嫌悪感がつのるばかりである。『テレーズ・ラカン』の序章で語られた原則によつて、我々はすべて許していたが無駄だった。

「私は、自分の小説が道徳的か不道徳的かわからない。告白すると、いずれにせよ私は今まで、作品を清純なものにしなくてはと考えたことはない。私にわかるのは、道徳的な人々が作品に見いだす不潔さを描こうと、私自身意図したことが一度もないということだ。つまり、識者の唯一の好奇心に応じることだ。つまり、識者の唯一の描写したのである」。

我々は信じるしかなかった。若者の中でさえ、ブルジョワジーを激高させる必要性から、識者の好奇心を主張するものがいた。しかし、空虚な議論で満足できなくなつていった。つまり、資料の粗雑さどころか、猥褻で暴力的表現で溢れた『ルーゴン』のページを前にして、明らかに抗えぬ感覚を各々抱くようになった。ゆえに、それを作家の陰部の病氣や孤独な聖人の妄想のせいにする人がいる一方で、

売り上げを極度に気にする作家が直感的器用さで無意識的に書いたのだと信じようとした人もいた。そして、彼らは、ゾラの成功は作品の文学性のおかげではなく、バカなヤツが大衆の声と謳つたボルノグラフィーの宣伝文句に踊らされて、『ルーゴン・マッカール叢書』を買う」事実によ來していると認めている。

確かに、ゾラは、売り上げの問題に過度に関心をもつているように思える（売り上げを聞いた我々の中にはそれを無視する輩もいるというのに）。しかし、彼が人里離れた場所で楽しく過ごし、初めは必要性から、次に信条から、禁欲を誇張したことも、明白である。若かりし彼はとても貧しく、臆病だったで、我々が女を知るだろうという年頃にも彼は少しも知ることがなかった。そして、明らかに誤ったイメージが彼につきまとつたのだ。また、腎臓の病氣から生じる精神不安によつて、おそらく彼は極度にある機能について心配するようになり、彼の中でその重要性は増していった。おそらく、シャルコー、モルソーや、我々にそれらのスカトロジの傾向を示したラ・サルベトリエールの医師たちは、彼の悪癖の症状を決定づけただろう。だが、この病的な原動力に対し、女性蔑視の人だけでなく、愛する力がある若者たちさえも、不安を言い足してはいけないのだろうか。

それが何であろうと、さらに最後まで、我々は寛大だった。ひたひたと広がった噂は、ある希望を前にして静まった。それが『大地』である。偉大な文学者の高尚な問題についての戦いを、我々は期待し望んでいた。個人的で内的な文献を収集し、農村をじっくりと分析し、ついには、『居酒屋』のような素晴らしい仕事を再開しながら、農民の中で光り輝くゾラを、我々は愛していたのだ。傑作への期待が、皆を沈黙させた。確かに、簡潔で大きい主題は、興味深い新事実を期待させるものだった。

かくして、『大地』は出版された。失望は深く、苦渋に満ちていた。観察が表面的なだけでなく、時代遅れの技法、平凡で特徴のない語り。しかし、猥褻な調子は、一瞬スカトロジの寄せ集めに直面している錯覚に陥いるほど、下劣な不潔さにまで落とされ、さらに激しくなっている。氏は、汚物の底まで身を落としたのだ。

そう、こうして冒険の幕は閉じた。真実の文学へのこの裏切り、そして成功に飢えた指導者が猥談へと突走るこの努力に、我々は断固決別する。我々は、ゾラの修辭法の中のお人好し達、途方もない人物像を拒絶する。それらは、超人的で、複雑さに欠け、急行列車のドアから偶然目にした場所へ、重い塊を乱暴に投げつけたかのようだ。『居酒屋』を世に送り出した、偉大な指導者のこの最後の作品、この

異種なる『大地』から、我々は断固離別する。しかし、悲しみが無いわけではない。我々が深く深く愛した人物を拒絶することは、本当に心苦しい。

我々の宣言は、偽りなき叫びである。良い悪いどちらにせよ、氏の倒錯行為と同一視される可能性に対し、己の作品を何としても守ろうとする若者の心の叫びなのである。もう少し待ってもいいのかもしれない、しかし、もはや我々に時間はない。明日になってしまえば、もうすでに手遅れなのである。我々は、『大地』が偉人の一時の衰えではなく、一連の失墜の預金残高、つまり、人間の純粹な治癒不可能な病的趣味なのだと確信している。我々は『ルーゴン』に明日を期待しない。小説が線路の上で、軍隊の上で何になるのか想像し過ぎたのだ。素晴らしい系藤樹はずっとその後、無益にも害悪な腕を伸ばしている。

今この宣言の中で、何度も繰り返されているのは、敵意は我々に生命を与えやしない、ということだ。偉人が穏やかに仕事を続けて行くのを見るのは、我々にとって心地よいことであつただろう。彼の才能の類廢が我々を導く動機ではない。この類廢の害となるような異常性が導くのだ。傷を負わされるのは避けなくてはならない。現実を抽出した書物に執着する自然主義者の肩書きは、我々にはもうふさわしくない。大義を守るため、迫害に果敢に立ち向かう

のだ。我々は恥ずべき墮落に与すのを拒否する。

これは、ある主義を標榜する人々の不幸である。その人々がこの主義を汚す日に、彼らを許すことなどできない。そして、ゾラは率直で露骨でさえある、多数の手法を与えてくれたのだが、彼に言えないことなどないのである。彼は、「生活のための戦い」を、上流階級とは相容れない愚鈍な「戦い」、つまり暴力的攻撃を認める「戦い」を、繰り返し唱えたではないか。「私は力である」と彼は声高に言った。友や、敵をつぶし、彼自身が穿った穴を、後に続く人々で塞ぎながら。

我々は、彼が誇示した偉大な才能に感嘆したから、不敬な考えを抱かずにいた。だがもし、「気質を通して見た自然のある空間」というこの有名な文句が、ゾラに関して言えば、「病的な感覚を通して見た自然のある空間」に変化してしまふとしたら、もし、我々が彼の作品に斧を振るう義務があるとしたら、それは我々の責任だろうか？ 公的批評が『大地』を攻撃しなければならぬ。小さな弾丸で一斉射撃をするように、明日の誠実な書物の上に、一丸とならなければいけない。勤勉な我ら若者の全力をもつて、我々の芸術的意識の誠実さをかけて、我々はある姿勢と尊厳を取り入れるのだ。健全で勇ましい野心の名の下、我々の信条の下、我々の深い愛情と「芸術」への最上級の敬意

の名の下、抗議すべき品位を失った文学の前で。

## 注

- (1) エミール・ゾラ「実験小説論」『世界文学大系四一』河内清編、筑摩書房、一九五九年
- (2) ゾラ「演劇における自然主義」『世界演劇論事典』安堂信也他編、評論社、一九八五年
- (3) ゾラは八月二二日付の『ジル・ブラス』紙で、自分はこの五人を弟子として認めていたわけではないので、絶縁を通告されても何でもないと答えている。(河内清「フランス文学事典」日本フランス語フランス文学会、白水社、一九七四年)
- (4) 各個人についての資料は数少なく、ここでは『フランス文学事典』(前掲書)から直接引用する。まずボンヌスタンは「自然主義の小作家のひとり、南仏ニームに生まれ、海兵として勤務後パリに出て自然主義一派の仲間にはいる。一八八三年極端な自然主義小説『シャルロは楽しむ』(Charlot s'amuse)を発表して重罪裁判所に召喚されたが許された。一八八四年『フィガロ』紙の通信員としてトンキンに出発し、数編の小説・紀行をもつてかえり、その他軍隊物などを次々と発表しているうちに、ゾラの『大地』をめぐる騒ぎが起こり、首謀者の一人として「五人宣言」を出した。だが手淫の研究『シャルロは楽しむ』の作者のこの行為は人々をあやしませればかりであった」(河内清)とある。ロニー兄に関しては「兄弟合作になる小説『ネル・ホーン』(Nell Horn, 1886)によって文壇にデ



ビュロー、自然主義の作家に数えられた。しかし一八八七年ゾラの『大地』が発表されるや、ゾラの立場を非難する『五人宣言』に参加、以後デカールヴらの自然主義の若い世代とともに理想主義的色彩をおびた社会小説の方向に進んだ（町田徳之助）と書かれている。デカールヴについては「小説家、劇作家。ゴンクールに師事し社会革命家の信念から社会悪を痛烈に批評した写実主義の小説を次々に発表した。『下士』（*Sous-offis*, 1889）、『塔』（*La Colonne*）などが代表作。かたわら自由劇場に参画し極端な写実劇をかく」（川島順平）とある。マルグリットに関しては「初め文部省の役人であったが自叙伝『わが父』（*Mon père*, 1844）で文壇に出、自然主義に属したがゾラよりむしろゴンクールに私淑、一八八七年ゾラを非難した『五人宣言』に署名した。ロシア作家の影響を受け、写実主義に心理描写をまじえた」（田辺貞文助）とある。

(5) Carlson, Marvin. *Theories of the Theatre*. New York: Cornell Univ. Press, 1993. p. 285.

(6) Carlson, *ibid.*, p. 285.

(7) Carlson, *ibid.*, p. 285.

(8) 『フィガロ』紙 一八八七年八月一日

Bibliothèque National et Université de Strasbourg 所蔵